

# Alert

## 反天皇制運動

# 17

号

[通巻 399 号]

2017 年  
11 月 7 日発行

第 17 期・反天皇制運動連絡会

### 今月の Alert

●「平成流象徴天皇制」の「努力」に対抗する運動を！——\*2

反天ジャーナル ●——横山道史、ななこ、大橋にやお子\*3

状況批評 ●「象徴」の統合力についての一考察

ポスト「平成」期の天皇制批判運動のために——鵜飼哲\*4

ネットワーク ●ピープルズ・プラン研究所連続講座

「平成」の代替わりの政治を問う——米沢薫\*7

書評 ●「安倍靖国参拝違憲訴訟・東京第一審記録集」——のむらともゆき\*8

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(90)

●山本作兵衛原画展を見に来たふたり——太田昌国\*9

マスコミじかけの天皇制(17) ●安倍政権の「退位特例法」づくりに対する

美智子皇后「感謝」の政治的意味その15——天野恵一\*10

野次馬日誌——\*11 集会の真相——\*14 学習会報告——\*15

反天日誌——\*16 集会情報——\*16

憲法 25 条 1 項は「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を保障し、この権利を保障するため生活保護法がある。同法は、生活困窮者に、その状況に応じ生活、住宅、教育などの 8 項目の扶助を支給することとし、その基準額は厚生大臣により決められる。

この生活保護基準が、2013 年と 14 年に 2 回にわたり変更された。生活扶助は、世帯人数や年齢によっても基準が異なるため状況はそれぞれだが、平均 6.5% も削減され、場合によっては 10% も給付額が切り下げられた。

これに対し、今、全国で生活保護基準の切り下げの違憲性を訴える裁判が闘われている。

十分な根拠もなく生活保護基準を切り下げれば、受給者は「最低限度」の生活ができなくなる。そして、「最低限度」の生活を否定するということは、「死ね」と言うに等しい。この国は、いったいどれだけ「弱者」をバッシングすれば気が済むのだろうか。

私の仕事は、公務労働の委託職場で、生活保護受給者への公共サービスの一部を担っている。けれども、職場では「トラブルの元だ」「面倒なサービスをなくせ」といった主張が日常的に飛び出す。障がい者に対しても同様だ。

労働組合が、労働者自らの権利を守り、拡張するための運動体であるならば、他者の権利を尊重し、守られなければならないのは当然である。そのことがなかなか理解されないことに悩む。

先の総選挙で自民党が圧勝し、改憲勢力が国会の 8 割を占めるようになった今、いよいよ重大な局面を迎えつつある。けれども、守るべきは戦後憲法の理念は、果たして私たちの生活に定着したものであっただろうか。未完というべき憲法を、破壊されるに任せることなく、私たちに手繰り寄せていく、そうした運動を職場でも目指していきたい。(川合浩二)



250 円

●定期購読をお願いします(送料共年間4000円)

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: [hanten@ten-no.net](mailto:hanten@ten-no.net)

今月の

Alert

「平成流象徴天皇制」の「努力」に対抗する運動を!



衆院選は自民党が単独で過半数を獲得し、自公で三分の二の議席を維持する圧勝だった。前回と同じく今回も自民党が最終演説を行ったのは秋葉原。多数の「日の丸」の旗に出迎えられ、北朝鮮の脅威をおおる安倍の演説に高揚する人々の姿に心のざらつきを覚えたのは私だけではなかったはずだ。安倍の言う「国難突破解散」は、学校法人「森友」「加計」問題による支持率低下を瞬時のものとしてしまった。「外敵を見出して国難を叫び、他国との緊張関係を高めて自国内で自らの権力強化を狙う指導者は枚挙にいとまがない」と政治学者がコメントしているが、まさにそのような選挙結果であった。戦後二番目の投票率の低さだったというが、年齢が低下するほど安倍の支持率が上がるということに、これまでざわざわと心穏やかではられない。

今回自民党や希望の党の対抗軸として立憲民主党が躍進した。改憲に「NO」を唱える人々の票もそこに流れたことは間違いないであろう。しかし、枝野が民主党時代九条改憲を提示していたことはやはり記憶しておくべきだろう。九条改憲を巡る政治状況が今迄とは明らかに違う時代に入ったということは認識する必要があると思う。今のところ世論調査では九条に自衛隊を明記することに五二%が反対しているということだが、「安倍政権下では反対」だという声に注視していきたい。そんな選挙戦の投票日の前々日である一月二〇日、朝日新聞は天皇退位の日程を一九年三月末と一面トップで報じた。その翌日に

は(東京)(毎日)(読売)各新聞もこぞって掲載した。この時点で菅義偉官房長官は選挙前でもあり否定をしたようだが第四次安倍内閣も発足し、すでに皇室会議の日程調整に入っていると思われる。

一月以降に皇室会議を経て(共同、読売では一二月との報道)、退位と改元の期日が決定され、一八年中に新元号公表。一九年三月三十一日に天皇退位、四月一日に皇太子ナルヒトが新天皇に即位し、新元号が施行されるという流れが予想されている。

一時浮上していた一八年の退位は、年末年始の宮中行事が立て込んでいる時期で物理的に難しいとか、アキヒトが一九年一月七日予定の『昭和天皇三十年式年祭』を自身でやることを強く望んでいるので、それまでは天皇でいたいからだとか、漏れ伝わる情報で真意のほどは定かではないが除外されたとみていいだろう。

今号の学習会報告で紹介したケネス・ルオフ著『国民の天皇』は、象徴天皇制が如何にして人々の間に浸透していったかを記するなかで、皇室も「国民」に受け入れられるように努力してきたという(学習会報告参照)。

いわゆるアキヒト「生前退位」メッセージから、その日程が具体化してきた今日に至るまで、こと天皇に関しては完全に翼賛体制化している実態を随所で見せられる私たちであるが、それもアキヒト・ミチコの「平成流象徴天皇制」の「努力」がなし得た成果の一つであることに間違いない。

では一体その「努力」とはどのようなものなのか。ルオフは天皇夫婦の行動目標は、社会の片隅に追いやられた人々を引き出すことと、戦後を終わらせることの二つであるという。実際、被災地巡行を熱心に行い、かつての激戦地を尋ねる旅を続けた。そして、それが象徴の務めであると天皇自ら象徴規定をするほどに使命とし励んだのだらう。

そのような天皇制を私たちはいらないと否定している。それはなぜなのか! その理由を自由に語らせてほしい。しかしそれを許さないのも天皇制だ。

天皇制はあらゆる側面に渡って修正が施され、近代化されてきたという。時代とともに変化してきた。そして反天皇制の運動も、その変化に対抗しその都度模索し思考してきた。これは否定することが出来ない抵抗運動の歴史だ。積み重ねられてきた議論は決して無駄ではなく、新しい仲間を繋ぐ力であると思っている。現在反天皇制の声をあげるのは少数者となってしまった。けれどもここ数年、新しい参加者が毎回増えていることも事実なのだ。

強制的に植え付けられた価値観を取り払い、私は天皇制から解放されたい。新しい天皇はいらない。終わりにしよう天皇制、仲間とともに!

「終わりにしよう天皇制」11・26集会デモと、恒例の12・23集会に来てね! 待ってます!

(鰐沢桃子)

## 住民ではなくリスクの管理を

二〇一七年九月一日、日本学術会議臨床医学委員会放射線防護・リスクマネジメント分科会の審議結果が公表された。「子どもの放射線被ばくの影響と今後の課題」と題された報告は、この表題はもとより、分科会の名称を文字通りに受け取れば、その役割は「リスク管理」の方針を示すことにあるはずだ。この場合の「リスク管理」とは、具体的には放射線防護策の検討である。

ところが、報告の内容はそのような予期を裏切るものである。この報告の基底に流れる発想はいわゆる「欠如モデル」である。「欠如モデル」とは、一般の人々が科学技術を受容しないことの原因は、科学的知識の欠如にあるとして、専門家が人々に知識を与え続けることで、一般の人々の科学受容や肯定度が上昇するという考え方を指す。

たとえば、報告の「はじめに」の部分にそれは象徴的に現れている。「……避難した住民の帰還を妨げている大きな原因の一つは、子どもへの影響に対する不安と怖れなど、放射線リスクの理解の難しさである」と。つまり、「問題」なのは、原発事故による放射線リスクではなく、放射線に対して人々が抱く不安や無理解が「問題」だというのである。

まったく意味不明な「問題」の転回である！

(横山道史)

## ああ、けったくそ悪い

ちよつと遊んでいる間に、安倍政権はウハウハいい気になっているし、野党は学級崩壊のような状態。今までも十分情けない世の中だが、いよいよ末期的な状態になってきた。「希望」って言葉、使いたくなくなっちゃったじゃん。

そのなかで安泰な風をみせている皇室。ちやくちやくと退位に向かっているスケジュール調整も進み、退位式も検討されているとか。再来年は天皇誕生日がないらしい(反天連集会もなしか?)。雅子も「公務」への出席が増えている。事実上禁止されていたフラッシュ撮影が「解禁」になったそう。雅子は皇后になると変わるぞと前から思っていたけど、本当にそうかも。美智子は誕生日の文書で災害関連、環境問題、スポーツ、カスオ・イシグロまで、ここぞとばかりに全面展開していた。来年の最後の「おことば」は、言いたいこと全部言いそう。

九州北部豪雨の被災地に行きたいと、福岡での海づくり大会の出席を前乗りして大分まで足を伸ばし、被災者は涙を流した。朝日新聞朝刊連載「平成と天皇」十一月一日の記事の中で、原武史の言葉が引用されている。「ソフトだが市井の人びとの内面まで届く強固な『国体』が確立された」。そして「天皇の言動によって、民意や政治が動かされる危険性に、もっと自覚的になるべきだ」と。むう、天皇一家や政府の好きにされてたまるかー！

(ななこ)

## 「アマテラスノオット」

私の住む東京都・多摩地域は、南朝方の公家が落ち延びてきたり、菅原道真の左遷の煽りを食らった三男が流されてきたりと、「中央から追放された人々」を敢えて受け入れる気質が無いでも無い。当然「都市伝説」の範ちゅうだが。今回はその究極な「落人都市伝説」をご紹介します。

それは新選組の故郷としても有名な日野市にある。北野街道沿いの宗印寺というお寺は境内に稲荷も祀っている。平山万福稲荷と名の付くそこは何故か鳥居が青い。その鳥居の近くに由来が書かれているのだが、読んだときは目を疑った。「平山万福皇大神は伊勢天照皇大神の夫神に当たる大神なり」。え？ なんて？ アマテラスの夫？ いや、そんなの知らない、というが、古事記にも日本書紀にも書いて無いだろ……！

ざっくり説明すると「太古は婦系制。故に夫は陰の存在であるため伏見稲荷に格下げ。しかし悪戯が過ぎて品格を下げたので寛政一一(一七九九)年に多摩地域に追放」されたのだそう。もーなに、このヘンテ「伝説」。多分ではあるが、「神とはいえアマテラスも女。しかも子どもも居る。夫が必要だろう」と、江戸時代の家父長制に合わせて都合よく作られた話なのではないだろうか。個人的には面白い。こんな変な人(神)まで受け入れるとはさすが多摩。しかしヘンテ「でもボンコツでも家父長制には代わりが無い。」「天皇陛下は大家族の父親」などという「究極の家父長制」が押し付けられるのは、絶対に勘弁ならない。

(大橋にゃお子)

反

天



ジャーナル



## 「象徴」の統合力についての一考察

ポスト「平成」期の天皇制批判運動のために

鶴飼哲（一橋大学教員）

天皇制を支持する声がとみに高まっていると伝えられている。すでに本誌で多くが語られているように、この声は今、従来リベラルとみられてきた層からより頻繁に聞こえるようになってきた。一方右派の側は、教育勅語復活まで視野に入れ、戦争のできる国家体制構築のために、天皇・皇族の全面的な政治利用への欲求をあられもなく露出させている（安倍政権）。あるいは、民衆の目になるべく触れずに神道儀礼にいそしむ宗教的権威であり続けること、もしくは擬似伝統的な「本来の」姿に戻ることをかたくなに求めている（生前退位に関する有識者会議における櫻井よしこ等の発言）。

権力中枢や世論の一部に存在するこうした体制内外の復古主義勢力と現天皇夫妻のあいだに、この間かなりの軋轢が存在してきたことは多くの兆候からみて事実だろう。明仁が「象徴の務め」と呼ぶ天皇による違憲的な「公的行事」の数々は、彼にとっては天皇制が将来にわたって存続するための必要条件である。「国民の人氣」を維持するためには、天皇は公共空間の光のなかで、「日本国民統合の象徴」であることを証明し続けなければならない。場合によっては、自己変容の劇さえ演じなければならない。一部で「第二の人間宣言」とも評された「生前退位」を求める明仁のメッセージは、そのような演技のひとつでもあった。

現天皇夫妻には、ポスト「昭和」期のこの天皇のありかたは自分たちの手で作り上げたものだという自負があるらしく、山県有朋、伊藤博文、井上毅ら明治藩閥政府の指導者たちによって考案・制度化され、一九四五年まで日本の近代史において猛威をふるった国家機構、民衆統治の政治的装置としての天皇像への多かれ少なかれ単純な回帰に帰着するような、安倍

政権やその周辺が求める役割に甘んじることには強い忌避感を募らせているようだ。この「葛藤」はしかし、おそらく矛盾とさえ呼べないレベルのものであり、結局のところ天皇の再元首化に向かう二つのコースの相違にすぎない。私たちがこの歴史的状况を適切に分析し、ポスト「平成」期の天皇制批判運動の課題を明確につかみ、大衆運動として展開することができなければ、遅かれ早かれ日本は、なんらかのかたちの立憲君主国として、その国制が定義し直される局面を迎えることになるだろう。明治維新一五〇年、天皇家の代替わり、改憲攻撃、オリンピックと続く、「ターゲットイヤー」二〇二〇年までの三年間が、この点でもまた、決定的に重要な歴史の転回点となることは間違いない。

この間の経緯を通して次第にはっきり見えてきたことのひとつに、明治憲法の神聖不可侵な権力中枢としての天皇規定と現憲法の象徴規定の関係が、宮澤俊義以来の「八月革命」説が想定してきたような天皇主権から国民主権への断絶的移行というより、ある種の引き算による元首権限の縮減だったということがある。「日本国の象徴」「日本国民統合の象徴」という天皇の二重の規定は、確かに言葉としては現憲法によって制定されたものだが、天皇の「象徴」化自体は、明治憲法の制定過程で遂行された政治的構築以外のなものでもない。そのことは山県有朋を準主人公として軍人勅諭發布から教育勅語發布までの時期を扱った松本清張の歴史小説『象徴の設計』（一九七六）がそのタイトルによって示している通り、従来から直感的に把握されてはいた。もとより憲法学においても断絶説に対する疑義が主として奥平康弘から提起されていたことなど、いまあらためて検証しておくべき論点が多い（西村裕一「『象徴』とは何か——憲法学の観点



から」、吉田裕・瀬畑源・河西秀哉編『平成の天皇制とは何か——制度と個人のほざまで』（二〇一七）。しかしここでは、歴史研究の側からも、この点について多少の光を当てておきたい。

中村政則は「日本の国民統合の象徴」という表現が米國務省極東課員マックス・ビショップによって一九四二年末に初めて使われたと仮定し、そのうえでその由来を、開戦時の駐日米大使ジョセフ・グルーからの知的影響に求めている。時期は前後するが、グルーは翌年の手紙のなかでこう述べていた。「天皇制にかんしていえば——現在の天皇個人と明白に区別されるべきものだが——それは保持されるべきであると、私の心中ははっきりしている。なぜなら象徴として、天皇制はかつて軍国主義崇拜に役立ったと同様に、健全かつ平和的な内部成長にとつての礎石としても役立ったからである。」（『象徴天皇制への道——米国外務省とその周辺』、一九八九）

ここで「象徴」という言葉は、法的言語としての行為遂行性を帯びる以前に、過去の事実を確認する文脈で用いられている。ここに示されているのは、天皇は明治期の近代国家形成過程で「象徴」になったという認識である。言い換えれば、前近代の列島居住民と区別される「日本国民」の近代的、政治的な統合は、この天皇の「象徴」化と軌を一にして進化したということだ。

最初に触れたリベラル派のなかからの天皇および天皇制の賛美は、改憲攻勢が強まるにつれて顕著となった、護憲派のなかの、現憲法をまるごと肯定したいという欲求の高まりを表すものだろう。そこには国民主権と象徴天皇制は矛盾しないという憲法観と、戦後日本をトータルに「平和国家」と規定する歴史観がともに含まれている。この立場にはしかし、戦後日本の一面的な肯定を超えて、明治維新以降の「日本国民」の形成と天皇の「象徴」化を、それなりの進歩として、いずれにせよ不可逆的な政治過程として追認するというもうひとつの含意が潜んでいる。このような主張が現在の改憲攻撃に反対する社会運動のなかから出てきたことは、逆説的にもこ

の政治過程が、近代国家形成期に一回限り生じた過去の事実ではなく、いまなお進行中の出来事でもあることを意味しているだろう。

しかし、そもそも憲法からみた「日本人」とは何だろうか。日本国憲法はその第十条で、「日本国民たる要件は法律でこれを定める」と規定している。しかし、一条と十条を照合してみれば、天皇がその「象徴」になりうるような統合の対象になりえないとみなされた者が、「日本国民たる要件」を満たさないことは明らかだろう。一九五二年四月二八日の主権回復に先立って旧植民地出身者、すなわち朝鮮人と台湾人から日本国籍が一方的に剥奪された事実は、このことを端的に示している。この主権的暴力が日本国憲法のもとで行使されたこと、さらに言えばこの暴力が日本国憲法の天皇規定のなかにあらかじめ内包されていたことは、どれほど強調しても強調し過ぎることはない。

別冊『文藝』の「天皇制——歴史・王権・大嘗祭」は現天皇の即位式が行われた一九九〇年十一月の直前に刊行されている。当時の主要な批判的研究者たちが、ポスト「昭和」期のおと口に立って、総力で「天皇制の謎」に取り組んだ記念碑的な一冊である。このところ再読していて、安丸良夫の次のような言葉が目にとまった。網野善彦、色川大吉、赤坂憲雄との対談（今、なぜ天皇制か）のなかでの発言である。

「色川さんや僕の立場が研究史的にいえば、どういう考え方と違うかといえ、たとえば丸山真男さんとか藤田省三さんとかの天皇制研究と違うのだと思うんです。」

たとえば丸山さんの『日本の思想』という書物は典型的なんだけれど、自然村的な共同体が天皇制を受容する基盤であり、上からの制度化とは矛盾をはらみながらもこうした共同体が近代天皇制を支えているという捉え方をしていると思うんです。僕たちはどうもそうじゃないような気がする。自然村のいちばん上のほうで支配している人たちは、あるいは天皇制のほうにつながっているかもしれないけれども、村の社会の中で生きている普通の庶民は、一般的には天皇制と日常的なかわりをもっていない。この

人々は要するに生活しているわけであってその生活のなかに戦争やその他の理由で対外接触がもちこまれたり、神道のお祭りなどがあれば、天皇制が影を落とすということはあるけれども、この人々にとっては生活することが何よりも大切なことです。そういうところへ天皇制が簡単に浸透してたとえば国体に対する「無限責任」の原理を押しつけることができる。考えるのは、論理的にはちよつとおかしいと僕は思うんです。」

ここには安丸が一時深い影響を受けた吉本隆明の思想の受容の跡が見て取れる。しかしそれとともに、天皇制が村落共同体の上層部からは「自発的隷属」を容易に調達できるとしても、民衆基層への天皇崇拜の浸透が一定以上の深さに達するとは容易に信じがたいという、歴史家としての慎重な判断も示されている。多少の飛躍を恐れずに言えば、憲法一条が想定するような天皇をその統合の「象徴」とする「日本人」は、かつて今も、基本的に社会の中間層以上に属し、天皇および皇族に対する相対的な「近さ」を、どこかで感じている人々なのではないだろうか。いずれにしても、一口に「統合」と言っても「象徴」の働き方には社会的な偏差があり、全「国民」にひとしなみに作用することなどはない。

安丸が丸山・藤田のものとみなす観点からは、未完の「国民」形成を徹底的に遂行し、「日本国民」が真の主権者になることによって天皇制を克服する道が開かれているとすれば、安丸の立場には、「国民」統合からアブリオリに排除される人々と、さしあたり「国民」の内部に含まれつつも統合の度合いの低い人々が、それぞれの仕方での統合空間の内外を分かちつ壁に穴を穿ち、そのようにして「象徴」の「有り難さ」を、次第に無意味なものにしていく可能性が示唆されているだろう。ポスト「平成」の天皇制批判運動が、この二つの展望をいずれも必要とすることは認めなければならぬ。個人の志向が、後者の側に著しく傾いているとしても。

## 「生前退位」!? なにやっテンノー!?

### 12/23 天皇制の戦争・戦後責任を考える 討論集会

12月23日はなぜ「国民の祝日」になっているのか。

それは天皇明仁の「誕生日」であり、

同時にいわゆる「A級戦犯」が処刑された日である。

「平成」天皇制は、明仁の意思に沿うかたちで

いま「代替わり」の過程にある。

「退位特例法」制定の過程で、天皇の存在は

これまでよりさらにクローズアップされてきた。

明仁の退位と新天皇の即位、さらに「明治150年」、

階層的な支配が強まり社会が分断される中で、

天皇の「慈愛」が強調される。

この状況に、どう切り込んでいくかを考えたい。

●日時：12月23日（土）13時30分開場

●会場：千駄ヶ谷区民会館2F

●討論提起：平井玄、天野恵一、桜井大子、北野誉

## ピープルズ・プラン研究所連続講座

### 「平成」の代替わりの政治を問う」

米沢薫(ピープルズ・プラン研究所事務局)

ピープルズ・プラン研究所(PPP研)はこの九月から「平成」の代替わりの政治を問う」と題する新たな連続講座を始めました。原則的に二ヶ月に一回のペースで、年を超えて続けられます。



第一回は、伊藤晃さん(近現代史研究)をお迎えして行われました。昨年の天皇の「ビデオ・メッセージ」とそれを受けて制定された「天皇退位等に関する皇室典範特例法」が中心のテーマです。

「平成」終了へのプロセスが、どのようにして突然、始められることになったのか。昨年の夏から「天皇退位」をめぐる起ったことを振り返り、そこで問題になっているのは何であるのかを改めて整理することができたことは、意義深いことだったと思います。

「平成」の終了は、もちろん天皇制の終わりではなく、次の天皇の支配する時間Ⅱ元号の始まりです。その「始まり」へと向かう、「終わり」へのプロセスに、無自覚的に巻き込まれることなく、その本質を正確に見極めること、またそれを通して、この流れに抗い、闘うために、何をなすべきか、第一回目の講座はその問いを深める貴重な契機になったと思います。

第二回は十一月一八日一八時半から、山口正紀さん(人権と報道連絡会)をお迎えして、「生前退位」に関するマスコミ報道の問題について話して頂きます。

戦後の天皇制はマスメディアを通じて「茶の間」に浸透していきました。象徴天皇制を作り上げていく過程で、マスコミはどのような枠割りを果たしてきたのか。天皇の「ビデオ・メッセージ」は正にその延長上に捉えられるものではなかったか。様々な観点から、こうした問題を深く掘り下げるために参加者の積極的な発言、討論を求めたいと思います。

このテーマを受け、第三回は「昭和」の終わりが取り上げられます。

二〇一八年一月二八日

反「昭和」Xデー闘争の〈経験〉を通して、「平成」代替わりを考える

問題提起は、国富健治さん、池田五律さん、北野誉さん、天野恵一さん。

仕組まれたスケジュールに従い則って、進められていく「平成」の終わりへのプロセスを考える時、それとは全く対照的にみえる「Xデー」と呼ばれた「昭和」の終わりの日々を思い起こすことは今、重要だと思います。

あの時、人々の生活に何が起こったのか、マスコミはその時、何を報道したのか、また何を報道しなかったのか。社会全体に広がっていた「自粛」という「現象」、あの圧力は、一体、何だったのか、等。当時、様々な場で「Xデー闘争」になった人たちから、貴重な体験が語られるはずです。

この時代の記憶を持たない人たちに、特に参加を呼びかけたいと思います。若い世代も交えて、

活発な討論が行われることを期待します。

現在、日程や内容が決まっているのは、三回目までです。それ以降については、現在、検討中です。この講座と一緒にいきたいと思われる方は、是非、講座運営の仲間に加わってください。ピープルズ・プラン研究所事務局はご連絡をお待ちしています。

今後のテーマとして今、上がっているものの一部を下に挙げます。

■「象徴としての公的活動」——「お言葉」、「皇室外交」、「国体・海づくり・植樹祭」

■明治一五〇年キャンペーンと近代天皇制をどう考えるのか

■原発と象徴天皇制——戦後の科学と文化を問い直す

■東京オリンピックと「生前退位」——ナショナルリズム・イベントの政治

■「昭和」から「平成」への連続と不連続

なお、この連続講座では毎回、講座が終了してからほぼ二ヶ月で記録パンフレットが作成されます。発題者の話だけではなく、質疑応答、討論もテープから起こされ、記録されます。このパンフレットは誰にでも実費でお分けしますので、ピープルズ・プラン研究所事務局までお問い合わせ下さい。

ピープルズ・プラン研究所

住所：〒112-0014

東京都文京区関口1-4-3 信生堂ビル2F

電話：03-6424-5748 FAX: 03-6424-5749

E-mail: ppsg@jca.apc.org



## 安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京事務局

### 『安倍靖国参拝違憲訴訟・東京第一審記録集』

のむらともゆき（同訴訟控訴人）

この「安倍靖国参拝違憲訴訟」については、すでに昨年一〇月と今年二月には大阪訴訟の一審・二審判決が出され、さらに、今年の四月に東京訴訟においてもひどい一審判決が出されたことは、「Alert」11号や、その他でも報告されている通りです。

現在、東京訴訟では二審の手続きに入り、大阪訴訟でも最高裁に向けた取り組みが開始されていますが、全体の情勢は「安倍忖度」も深まり、とうてい、希望を抱かせるものではありません。

しかし、こうした現実に対する違憲訴訟を提起することは、ただ法廷での「結果」だけの意味にとどまるものではないことは「存じのとおりです。私たちが取り組んだ、この東京での違憲訴訟においては、海外を含む多数の原告や、法律・歴史学の専門家証人によって、重要な問題提起がなされており、それ自体が意味を持つものだということを、改めて強調したいと考えます。この「一審記録集」は、B5判並製・三一六ページ・四段組みにわたり、二〇一四年から今年までの闘いの記録がまとめられています。

裁判所は、このような多数の原告が立った裁判では、極力、書面提出のみにさせ、要旨の朗読のみを制限された時間内で処理しようとしています。しかし、弁護団と事務局は、ぎりぎりまで、できるだけ多数の証言を実現させようと努力を重ねました。専門家証人の吉田裕（歴史学）、青井未帆（憲法学）、木戸衛一（歴史学）、南相九（歴史学）、張剣波（歴史学）の各氏の証言は意見書提出とさせられましたが、この記録集には、この専門家意見書に加え、実現され

た原告八名の意見陳述、原告二十二名の本人尋問の発言内容が全文掲載されています。

憲法訴訟の記録集、なおかつ大部の資料だということで、原告や法曹関係者以外は手に取りにくいものと思われるでしょう。訴因の法的根拠などを述べる弁護側の書面や、判決文などにおいては、そのことだけを取り上げるならば確かに否定しづらい面があります。しかし、今回のこの訴訟においては、口頭弁論が重視され、多数の原告が意見書を提出し、法廷において自ら意見陳述に立っていったのです。

この原告たちの証言は、いずれも、とても熱のこもったものでした。そして、何よりも強調したいのは、これらの証言が、自らの具体的な個人史に裏打ちされたものであり、歴史的な事実を述べるタイミングにも、政治に対する危機意識や憤りを語るときにも、きわめて同時代的に、ひと一人の尊厳を懸けた発言内容であったということです。

大日本帝国による戦争が、侵略と植民地支配によりひとを殺害し、またはその手先とさせられて「戦死」させられたという事実（靖国により「戦没」者がその名を奪われ「××命（ミコト）」と改変されて「祀られ」、観光客に向けて遊就館に「陳列」されているシロモノが示す意味とは、まったく次元を異にするものです。死者が誰であったのか、その死をどのように受け容れさせられようとしたのか、そしてその死者を誰がどのように利用して、虚偽そのものでしかない「歴史」や政策、妄動や暴力の煽動へと変えていったのか、それこそが靖国でありこれを明らかにして否定することこそが、この裁判の意味でもある。

証言に立った原告たちの多くは高年齢層であり、枯れた柔らかな印象の方たちです。しかし、その胸の裡に持ち続けている悲しみや怒りが証言の言葉として迸るのを、傍聴席で聞いていて、思わず息詰まり涙ぐむことをしばしば抑えられなくなりました。こうした訴訟がなぜ必要なのか、裁判という場をかりて、ひとの歴史をつないでいくことの意味を、深く考えさせられました。

政教分離原則や、信教、思想信条の自由、平和的生存権や人格権など、被告人の権利や法益のあらゆる点が、一審判決では無視され足蹴にされましたが、この裁判は、最初に触れたようにまだ継続中です。そして、あらためて強調したいのは、この裁判のみならず、あらゆる方面から、私たち自身の生と歴史の意味をつき出していくことの重要性です。もし憲法訴訟に敷居の高さを感じる方がいるとすれば、それは誤解です。歴史をつなぐこと、憲法を生かすということが、一人の人間においてどのようなことであるか、ほんの一端でも、この記録集の原告証言や弁論からくみとってほしいと、心から願います。

二〇一七年八月一五日発行、二〇〇〇円  
 申込先：〒202-0022 東京都西東京市柳沢 3-1-13  
 郵便振替口座：00170-2-291619  
<http://seikyobuntiten-no.net>  
[mailto://noyasakuni2013@gmail.com](mailto:mailto://noyasakuni2013@gmail.com)



みたび

# 太田昌国の夢は夜ひらく90

## 山本作兵衛原画展を見に来たふたり



数年前のことだった。東京タワーの展示室で「山本作兵衛原画展」が開かれた。筑豊の炭鉱で自らが従事した鉱山労働の様子や、労働を終えた後の一時のくつろぎの仕方までを絵筆をふるって描き、深い印象を残す人物である。筑豊は谷川雁、上野英信、森崎和江などの忘れ難い物書き（関連して、後述する水俣の石牟礼道子も）を生んだ土地であり、私はそれらの人びとへの関心の延長上で作兵衛の作品にも画集では出会っていた。

原画にはやはり独特の趣があつて、来てよかったと思つた。原画展の会場を去る時、ひとりの友人とすれ違った。その彼女が深夜になってメールをくれた。あのあと会場で作品を見ていると、今日は緊急に閉場しますというアナウンスがあつたので、そんなことは展覽会案内のホームページにも書いていない、まだ見終えていない、と抗議していると、どこからともなくわらわらと大勢の黒い服の男たちが現われ、見る見るうちに会場を制圧した。そしてその奥から、天皇・皇后の姿が現われた……と。

作兵衛画の鑑賞を突然断ち切られた友人の怒りは当然として、同時に、作兵衛展を見に行くとは、皇后もなかなかやるな——と私は思った。この展覧会の少し前に、ユネスコは作兵衛の作品を世界記憶遺産に指定していた。この年には、チェ・ゲバラが遺した文書（日記、旅行記、ゲリラ戦記など）も、キューバ・ボリビア両政府からの申請で同じ遺産に指定されており、そ

れぞれの国では自国に縁のある文物が記憶遺産に指定されることに〈自民族至上主義的に〉大騒ぎする。日本社会も、描いている主題からして日頃はさして注目もしていない山本作兵衛の作品が、世界的な認知を受けたといつて盛り上がりつついたとはいえ、このような社会的「底辺」に関わる表現にまで目配りするとは、さすが皇后、と思つたのである（この展覧会に来るという「見識」を持ち得るのは天皇ではなく皇后だろうという判断には、大方の賛同が得られよう）。

こんなことを思い出したのは、去る一〇月二〇日、八三歳の誕生日を迎えた皇后の文書が公表されたからである。二ヵ月早く今年の回顧を行なった感のある同文書を読むと、森羅万象に関わる皇后の関心の広さ（あるいは、目配りのよさ）がわかる。震災の被災者や原爆の被害者への言及を見て、「弱者に寄り添う」という表現もメディア上では定番化した。今回は特に、兵器歴絶国際キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞したことにも触れており、これには明らかに、核廃絶への取り組みに熱心ではない安倍政権への批判が込められているとの解釈もネット上では散見された。学生時代の彼女は（一九三四年生まれの世代には珍しいことではないが）、ソ連の詩人、マヤコフスキーやエセーニンの作品を愛読していたという挿話もあつて、〈個人としては〉時代精神の優れた体现者なのだろう。

だが、ひとりの人間として——というためには、他

の人びととの在り方と隔絶された特権を制度的に享受する立場に立たない、という絶対条件が課せられよう。作兵衛展に出かけるにしても、一般人の鑑賞時間を突然に蹴散らしてでも自分たちの来場が保証されるという特権性に、彼女が聡明で優れた感覚の持ち主であれば、気づかぬはずはない。自分たちが外出すれば、厳格極まりない警備体制によって「一般人」が被る多大な迷惑を何千回も現認しているだろうことも、言うを俟たない。「弱者」に対していかに「慈愛に満ちた」言葉を吐こうとも、己の日常は、このように、前者には叶はずもない、そして人間間の対等・平等な関係性に心を砕くならば自ら持たないとも思わないはずの特権に彩られている。その特権は「国家」権力によって担保されている。この「特権」と、自らが放つ温情主義的な「言葉」の落差に、気が狂れるほどの矛盾を感じない秘密を、どう解くか。

凶暴なる国家意志から、まるで切り離されてでもいるかのように浮遊している「慈愛」があるとすれば、それには独特の「役割」が与えられている。彼女が幾度も失語症に陥りながらも、皇太子妃と皇后の座を降りようとしなかったのは、自らの特権的な在り方が「日本国家」と「日本民族」に必要だという確信の現われであろう。

高山文彦に「ふたり」と題した著書がある（講談社、二〇一五年）。副題は「皇后美智子と石牟礼道子」である。そのふるまいと「言霊」の力に拠つて、後者の「みちこ」及び水俣病患者をして心理的にねじ伏せてしまふ、前者の「みちこ」のしたたかさをこそ読み取らなければならぬ、と私は思った。「国民」の自発的隷従（エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ）こそが、〈寄生〉階級たる古今東西の君主制が依拠してきている存立根拠に違いない。

（二一四月日記）

マスコミの  
「ミ」の  
「け」の  
「天」の  
「皇」の  
「制」の  
16

# 安倍政権の「退位特例法」づくりに対する 美智子皇后「感謝」の政治的意味 〈壊憲天皇明仁〉 その15

天野 恵一



まったく国家を私物化してしまっている政権であることがグロテスクに露呈してしまっている状況下での衆議院選挙。スキャンダル隠蔽のためということがミエミエの（ハレンチ国会解散）。

多くの人々が安倍一強政治の終焉を予測したこの選挙、なんと結果は、安倍自公連立政権の圧勝に終わった。TVのニュースショーで、ある自民党議員の以下のような言葉が紹介されていたのが、強く記憶に残っている。

「安倍首相が一番の嫌われ者でスタートしたこの選挙、途中で小池が一番の嫌われ者になった。おかげで勝てた、小池さんに感謝しなくっちゃ」。

マスコミがこぞって誰を（嫌う）かが決定的なのだ。

「希望の党」が圧勝（東京は自民ゼロ予測）という「希望」ブームでスタートしたこの選挙、「希望（小池）が飲みこんだ「民進党」議員の一部「排除」発言から、マスメディアのトーンが希望（小池）ヨイショからバッシングへと急速に転換。結果として、小池独裁批判と、排除された枝野たちが立ち上げた「立憲民主」への同情が生まれ、誰ひとり議員総会で「希望」合流に反対しなかったことなど無視して、「リベラル立憲」は「筋を通した」という政治神話をうみだし、「希望」を追い落とし、安倍自民大勝の下で「立憲民主」が野党第一党とあいなった。

このマスメディアがつくりだした物語通りの選

挙結果が連日予測され（この「予測」報道自体が強力な操作なのだが）、その通りの結果が現実のものとなった。

マスメディアが一体化して演出しているこの選挙政治の大枠（ムード的な物語）は、いったい誰がつくっているのだろうか。とにかく、マスコミが主役、マスコミじかけの選挙の時代が全面開花しているのだ。

さて、マスコミじかけの象徴天皇制のほうはどうか。「生前退位」スケジュール決定報道があった。それを『週刊新潮』（十一月二日号）は、こうレポートしている。

「そんな中、朝日新聞は一〇月二〇日付一面トップで、皇后さま八三歳の誕生日に合わせるように（天皇陛下退位一九年三月末日、即位・新元号四月一日）と打ってきた」。

「ともあれこの記事はライバルを出し抜くものだが、翌朝には、／天皇退位一九年三月末有力（読売）／退位「一九年三月末」有力（毎日）／天皇退位一九年三月有力（東京）／などと各紙が後を追いつ、テレビでもTBS、テレビ朝、フジが同様に報じた。他方、音なしの構えを見せているのは、産経、日経、そして前述の退位報道をスクープしたNHKである」（「雅子妃の公務は七倍に！『天皇退位日』決定でいや増す『美智子皇后』のご懸念」）。

皇室会議という不可欠の手続きも踏んでいない段階での予測記事、政府サイドは、当然最終決定

はしていない。今月一日に（「新元号、平成三十一年元日から」と一面トップで飛ばした産経などは「音なし」というわけだ。あせってスクープ合戦という状況が続いているが、私たちが立ち止まって考えるべきことは、このスケジュールの前提となっている「退位皇室典範特例法」についてである。

美智子皇后は、『朝日』の一面スクープ報道の日の誕生日会見で、以下のように発言している。

「長い年月、ひたすら象徴のあるべき姿を求めてここまで歩まれた陛下が、御高齢となられた今、しばらくの安息の日々をお持ちになられるということに計り知れない大きな安らぎを覚え、これを可能にしてくださった方々に深く感謝しております」。

この、天皇自身の発言による皇室典範の改正という（違憲立法）を行なった安倍政権と、それを支持した多くの「国民」への感謝の言葉である。高齢者が「安息の日々」を持つこと一般に私たちも反対ではもちろんないが、こんな天皇の法律づくりという政治手法は立憲主義原則の禁じ手である。それに何故、あたりまえの人間（非特権的）存在なる方向での「退位」が考えられなかったのか（いいかえれば、皇位という特権の自己放棄という方向での自己解放でないのか）を問う主張が、マスコミにはどうしてまったく不在なのか、なぜそれがタブーとされてしまっているのか。

このタブーを自明の前提とするスケジュール論議は不条理ではないのか。

改憲へ向かう安倍政権と連動した（アキヒト・ミチコ壊憲天皇制）の象徴天皇の再定義政策に、NO！の声を。

# 皇太子日記

10月1日～10月31日

【10月1日】

明仁、美智子◆愛媛県武道館（松山市）

で国体の剣道の試合を観戦。特別機で帰京。午前中、同市の国指定重要文化財「道後温泉本館」を訪れ、外観を見学。1894年に改築された道後温泉本館は、大正天皇や昭和天皇も入浴した皇室専用の浴室「又新殿」があり、翌年秋以降、長期の耐震補強工事に入る予定と報道。

徳仁◆東京都渋谷区の国立劇場を訪れ、ドイツの作曲家ワーグナー作のオペラ

「神々の黄昏」を鑑賞。

秋篠宮、紀子◆南米チリで、宿舍があるプエルトバラスから約120キロ離れた場所にあるサケの養殖場を視察。プエルトバラス郊外のビセンテ・ペレス・ロサレス国立公園を見学。空路で首都サンティアゴに戻る。

出迎え◆安倍晋三首相が羽田空港で、国民体育大会開会式出席などのため愛媛県を訪問し、帰京した明仁、美智子を出迎え。

【10月2日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が27～30日の日程で福岡、大分両県を訪問すると発表。福岡県で開かれる全国豊かな海づくり大会の式典出席などに合わせ、九州北部の豪雨の被災地を見舞う予定で、当初は式典出席のため、28日から2泊3日の日程だったが、7月の豪雨を受け、明仁、美智子の意向もあり、1日

早めて被災地にも足を運ぶことになったと報道。

徳仁、雅子◆京都市で開催中の「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム」に出席するため、新幹線で京都入り。到着後、世界遺産の二条城で国宝「二の丸御殿」を視察。徳仁が、世界遺産の醍醐寺を視察。

秋篠宮、紀子◆南米チリから民間機で帰国の途に就く。

【10月3日】

徳仁、雅子◆京都市の国立京都国際会館で開かれた「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム」の閉会式に出席。徳仁があいさつで「科学技術をどう扱うかを議論し、世界人類の将来にとって有益なものとなることを心より願います」。徳仁が閉会式後、ノーベル医学生理学賞を受賞した京都大の山中伸弥教授らフォーラム参加者と懇談。雅子は懇談への出席を見送る。新幹線で帰京。

宮内庁職員◆栃木県警矢板署が、自宅で猟銃など3丁を所持していたとして、銃刀法違反の疑いで、宮内庁御料牧場畜産課長を逮捕。逮捕容疑は、自宅のたんすの中に散弾銃2丁と空気銃1丁を所持していた疑いと報道。

【10月4日】

明仁、美智子◆ブルネイのボルキア国王の即位50周年に祝意を示すため、東京都

品川区の在日ブルネイ大使館を訪れ記帳。

明仁が祝電を送る。宮内庁によると、ブルネイ側から6日に同国で開かれる即位50年を祝う行事への招待を受けていたもので、期日が近いため出席は見送ったが、祝意を示したいという明仁、美智子の意向で記帳に訪れることになったと報道。

秋篠宮、紀子◆南米チリから羽田着の民間機で帰国。

【10月5日】

眞子◆愛媛県で開催されている国体競技などを視察するため、羽田発の民間機で同県入り。

【10月6日】

秋篠宮、紀子◆前年10月に死去したタイのプミポン前国王の葬儀に参列するため、秋篠宮、紀子が10月26～27日の日程で、同国を訪問することが、閣議で了承される。／南米チリ訪問について「120周年を一つの契機として、日本とチリとの友好関係がさらに促進されることを心から願っております」との感想を発表。

眞子◆愛媛県砥部町の体育館で国体のパドミントンの試合を観戦。

【10月7日】

眞子◆愛媛県西予市の「乙亥会館」で、国体の相撲の試合を観戦。

【10月8日】

美智子◆東京都中央区の浜離宮朝日ホールを訪れ、東日本大震災の被災地を支援するために開かれた歌手矢口周美らが出演するチャリティーコンサートを鑑賞。

徳仁、雅子◆東京都千代田区のパレスホテル東京を訪れ、訪日したデンマークの

フレデリック皇太子夫妻を出迎える。

眞子◆東京都江東区の有明コロシアムを訪れ、テニスの楽天・ジャパンオープンを観戦。

北原派◆成田空港の廃港を主張する三里塚・芝山連合空港反対同盟北原派が、空港用地内の畑で恒例の全国集会を開き、8月に95歳で死去した北原鉞治・事務局長を追悼。

【10月10日】

徳仁◆東京都千代田区の国立公文書館を訪れ、訪日中のデンマークのフレデリック皇太子夫妻と共に、特別展「日本とデンマーク―文書でたどる交流の歴史」を鑑賞。

成人年齢引き下げ◆成人年齢を現行の20歳から18歳に引き下げる民法「改正」案と、それに伴う関連法「改正」案の全容が、政府関係者への取材で分かる。天皇と皇太子、皇太孫の成年を18歳と定める皇室典範の条文は民法「改正」に合わせて削除するなど、民法や皇室典範を含めて計25の法律を改めると報道。

秋篠宮、紀子◆松山市のニンジニアスタジアムで行われた第72回国民体育大会「愛顔つなぐえひめ国体」の閉会式に出席。

福島原発事故◆東京電力福島第1原発事故の被災者約3800人が国と東電に損害賠償などを求めた訴訟の判決で、福島地裁が国と東電の責任を認定し、原告約2900人に総額約5億円を支払うよう命じる。

【10月11日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が皇居・東御



苑の音楽ホール「桃華楽堂」で、太平洋戦争で犠牲になった6万人を超える商船や漁船の船員を慰霊し、平和を祈るためとして創作された能楽「海霊」を鑑賞。

秋篠宮、紀子や故高円宮の妻久子が同席。海霊は、神奈川県横須賀市に建立された「戦没船員の碑」の完成を記念し、1971年の第1回戦没船員追悼式で奉納される演出として創作されたと報道。

明仁、美智子◆訪日しているデンマークのフレデリック皇太子夫妻を皇居・御所に招き、共に昼食。

徳仁、雅子◆東京都八王子市の高尾みころも霊堂を訪れ、労働災害で亡くなった人を慰霊する「産業殉職者合祀慰霊式」に出席。黙とうし、祭壇に供花。／東京・元赤坂の東宮御所で、訪日しているデンマークのフレデリック皇太子夫妻と共に夕食。

#### 【10月12日】

徳仁、雅子◆訪日中のデンマークのフレデリック皇太子夫妻と共に、日本と同国の外交関係樹立150周年を記念し東京都目黒区のホテルで開かれた晩さん会に出席。

承子◆日本ユニセフ協会（東京都港区）に勤務する故高円宮の長女承子が、徳島市の八万小学校を訪れ、紛争や貧困に苦しむ世界の子どもの現状を紹介する「出前授業」をする。

米軍ヘリ事故◆沖縄県の富川盛武・副知事が、米軍普天間飛行場（宜野湾市）所属のCH53E大型輸送ヘリコプターの不時着事故で、機体の部品の一部に、放

射性物質が含まれている可能性があるとして、中嶋浩一郎・防衛省沖縄防衛局長に対し、有害物質の有無の調査を求める。

#### 【10月15日】

徳仁◆横浜市のパシフィコ横浜で開かれた「第18回世界肺癌学会」の開会式に出席。式終了後、会議の関係者と懇談。

#### 【10月17日】

靖国問題◆安倍晋三首相が、東京・九段北の靖国神社で始まった秋季例大祭に合わせ「内閣総理大臣 安倍晋三」名で「真榊」と呼ばれる供物を奉納。超党派の議員連盟「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」会長の尾辻秀久・自民党参院議員が靖国神社を参拝。秋季例大祭には、加藤勝信・厚生労働相や伊達忠一・参院議長、日本遺族会会長の水落敏栄・文部科学副大臣も真榊を奉納したと報道。

#### 【10月18日】

徳仁◆東京都渋谷区のNHK放送センターを訪れ、教育に関する世界の優れたテレビ番組やウェブサイトを対象にした第44回「日本賞」教育コンテンツ国際コンクルの授賞式に出席。

靖国参拝◆自民党参院議員の衛藤晟一・首相補佐官が、東京・九段北の靖国神社を秋季例大祭に合わせて参拝。

元残留日本兵◆第2次大戦後もベトナムにとどまり、その後帰国を余儀なくされた元残留日本兵の子どもらが、ベトナムから訪日。訪日したのは、元日本兵の子で60〜70代の13人と、子の妻らで、当年2〜3月、明仁、美智子がベトナムを訪れた際、ハノイで妻や子どもらと面会

したと報道。

#### 【10月19日】

徳仁、雅子◆東京都千代田区の東京国際フォーラムで、全日本中学校長会などが開く「中学校教育70年記念式典」に出席。御料牧場◆宮内庁が、皇室で用いられる農畜産物を育てる御料牧場（栃木県）で、見学会を開く。33人が参加。

#### 【10月20日】

天皇、皇族◆美智子が83歳の誕生日を迎えたとして、皇居の御所や宮殿で祝賀行事が行われる。河相周夫・侍従長ら側近による祝賀が御所であり、宮殿で、徳仁、雅子ら皇族や安倍晋三首相夫妻、閣僚らに加え、山本信一郎長官ら宮内庁幹部が祝意を伝える。正午から明仁、美智子と皇族、元皇族らが集まる祝宴の場が設けられる。秋篠宮、紀子が、悠仁を連れて半蔵門から皇居に入り、徳仁、雅子と愛子が続く。愛子と悠仁は夕食会には加わらず、美智子に祝いのあいさつをする。夜、徳仁、雅子と秋篠宮、紀子、黒田清子夫妻が御所に集まり、明仁、美智子と共に夕食。

明仁退位◆明仁の退位日を2019年3月31日とし、徳仁が翌4月1日に新天皇として即位する案が政府内で有力となっていることが分かる。新たな元号は翌年発表され、即位と同じ日に施行される見通しと報道。政府は退位日などの決定の前提となる皇室会議を11月にも開いて意見聴取した上で、退位日を政令で定めると、政府関係者が明らかに。／菅義偉・官房長官が記者会見で、明仁の退位日を

2019年3月末とする一部報道について「そうした事実はない」。退位日決定に向けた皇室会議の開催に関して「全く決めていない」。新元号の公表時期については「憲政史上初めてのことで、現段階で示すことは極めて困難だ。国民生活への影響を考慮しながら適切に検討していく」。

美智子◆83歳の誕生日を迎え、宮内記者会の質問回答した文書の内容を公表。明仁の退位を実現する特例法の成立に触れ「陛下がご高齢となられた今、しばらくの安息の日々をお持ちになれるということに計りしれぬ大きな安らぎを覚え、これを可能にしてくださった多くの方々に深く感謝しております」と書いたと報道。

靖国問題◆安倍内閣の閣僚は17〜20日まで秋季例大祭が開かれていた靖国神社に参拝せず、8月の「終戦記念日」に続く参拝者ゼロとなったと報道。

#### 【10月22日】

徳仁、雅子◆宮内庁が、徳仁、雅子が全国農業担い手サミットの開会式に出席するため、23日午前に予定していた高知県への出発を、午後延期すると発表。台風21号の影響で搭乗予定だった羽田発の民間機が欠航になったためと報道。

#### 【10月23日】

天皇、皇族◆眞子が26歳の誕生日を迎えたとして、明仁、美智子にあいさつをするため、皇居・御所を訪れる。

明仁◆皇居・御所で、ミクロネシア連邦のクリスチャン大統領と会見。宮内庁によると、約20分の会見で、明仁が、戦没者慰霊のため2015年4月にパラオを



訪れた際、ミクロネシア連邦のモリ前大統領が現地で行ったことを懐かしがり「帰国したらよろしくお伝えください」。

**徳仁、雅子**◆全国農業担い手サミットの開会式出席などのため、羽田発の民間機で高知県入り。当初、午前に出発予定だったが、台風21号の影響で午後になり、南国市で野菜栽培を手掛ける会社「南国スタイル」で、パプリカを育てるビニールハウスを視察。徳仁が高知市内のホテルで、サミットの関係者らとの交流会に参加。雅子は欠席。

#### 【10月24日】

**美智子**◆ブータンのジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王の妹で訪日中のソナム・デチュン・ワンチュク王女を皇居・御所に招き、共に飲食。

**徳仁、雅子**◆高知市の県立高知城歴史博物館で、幕末の歴史や高知県ゆかりの展示を見る。雅子は見学を見合わせる。高知市内のホテルで、県内の若手農業従事者との交流会に参加。高知市の県立春野総合運動公園で開かれた全国農業担い手サミットの開会式に出席。徳仁が式典で「互いの情報や知識を交換し合い、将来あるべき姿について議論されることは、日本の農業と各地域の発展のために意義深いこと」とあいさつ。地元の農業高校の生徒らと懇談。空路で帰京。ブータンのジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王の妹で訪日中のソナム・デチュン・ワンチュク王女を東宮御所に招き、懇談。**信子**◆宮内庁が、故寛仁の妻信子が11月5日から、オランダの首都アムステルダムを「私的」に訪問すると発表。国際青年会議所の世界会議開会式や総会に出席し、10日に帰国すると報道。

ムを「私的」に訪問すると発表。国際青年会議所の世界会議開会式や総会に出席し、10日に帰国すると報道。

**トランプ 訪日**◆菅義偉・官房長官が記者会見で、トランプ米大統領が「公式実務訪問賓客」として11月5～7日の日程で訪日し、明仁、美智子と会見すると正式発表。

#### 【10月25日】

**明仁、美智子**◆東京都千代田区の国立劇場で、文化庁芸術祭が主催する歌舞伎公演「通し狂言 霊験亀山鉾」を鑑賞。

**徳仁、雅子**◆宮内庁が、東日本大震災からの復興状況を視察するためとして、徳仁、雅子が11月1日に、日帰りで宮城県を訪問すると発表。

#### 【10月26日】

**明仁、美智子**◆宮内庁が、明仁、美智子が11月16～18日、鹿児島県の屋久島や奄美群島を訪問すると発表。／宮内庁が、明仁、美智子が31日にフィリピンのドゥテルテ大統領と皇居・御所で会見すると発表。

**明仁退位**◆政府が、明仁が2019年3月に退位し、徳仁が翌4月1日に新天皇に即位する案が有力となっているとして、事前に準備組織を設置する検討に入ったと、政府関係者が明らかに。

**徳仁、雅子**◆東京都千代田区のホテルを訪れ、地球環境行動会議が主催する国際会議の開会式に出席。

**秋篠宮、紀子**◆前年死去したブミボン前国王の葬儀に参列するため、羽田発の民間機でタイの首都バンコクに到着。王宮

前広場で営まれたブミボン前国王の火葬式に参列。

**秋の園遊会**◆宮内庁が、明仁、美智子が「主催」し、11月9日に東京・元赤坂の赤坂御苑で催される秋の園遊会の招待者を発表。

**「慰安婦」問題**◆「従軍慰安婦」関連資料の「世界の記憶」（世界記憶遺産）への登録について、韓国外務省報道官が「政府が努力している」と発言したことに対し、日本政府が2015年の政府間合意に反していると抗議したことが分かる。

#### 【10月27日】

**明仁、美智子**◆7月の九州北部の豪雨で被害が出た福岡、大分両県の被災地を訪ねるためとして、羽田発の特別機で福岡県入り。福岡県朝倉市杷木地区に向かう車の中から、土砂が堆積している状況を視察。朝倉市杷木支所で、同市と同県東峰村の被災者6人と面会。大分県日田市役所に移り、同市の被災者5人と懇談。

**徳仁**◆全国障害者スポーツ大会の開会式出席などのため、羽田発の民間機で愛媛県入り。松山市のホールで開かれた愛媛県選手団の激励会に臨席。

**秋篠宮、紀子**◆タイから空路で帰国。三笠宮墓所一周年祭◆前年10月に100歳で死去した三笠宮の「墓所一周年祭の儀」が、東京都文京区の豊島岡墓地で営まれ、喪主の三笠宮の妻百合子や長男の故寛仁の長女彬子ら皇族、旧皇族、宮内庁職員ら約50人が参列。

#### 【10月28日】

**明仁、美智子**◆福岡県北九州市内のホテルで開かれた全国豊かな海づくり大会の歓迎レセプションに出席。大会の参加者らと懇談。これに先立ち、産業用ロボットの製造などを手掛ける安川電機の展示施設（同市）を訪れ、歩行補助装置の実演や最新のロボットアームを見学。

**徳仁**◆松山市の愛媛県総合運動公園陸上競技場で、全国障害者スポーツ大会の開会式に臨席。あいさつで「参加された皆さんの中から、3年後の東京パラリンピックに向けて力強く羽ばたく選手が数多く誕生することを期待している」。今治市に移り、市営中央体育館で仙台市と岡山県の車いすバスケットボールの試合を観戦。

**眞子**◆東京都江東区の有明コロシアムで開催中の全日本テニス選手権の女子シングルス決勝戦を観戦。

**南京虐殺**◆中国江蘇省南京市にある南京大虐殺記念館の張建軍館長が共同通信と同館で会見し「日本の現職首相が一人も記念館に来ていないのは奇妙だ」と述べたと報道。

#### 【10月29日】

**明仁、美智子**◆福岡県宗像市の宗像ユリックスで開かれた全国豊かな海づくり大会の式典に出席。宗像市の漁港で予定されていた稚魚の放流が、台風22号の影響で取りやめに。式典に先立ち、7月の九州北部の豪雨で被害に遭った人たちに黙とう。7月に世界文化遺産に登録された宗像大社を参拝し、玉串を奉納。同大社が所蔵、展示する国宝の勾玉や鉄製の剣などを鑑賞。

**徳仁**◆愛媛県から羽田着の民間機で帰京。

百合子、彬子◆前年10月に死去した三笠宮を皇居の皇霊殿に祭る「霊代を皇霊殿に遷すの儀」が営まれ、三笠宮の妻百合子や長男の故寛仁の長女彬子らが参列。東京・元赤坂の赤坂御用地にある三笠宮邸に設けられた「権舎」での儀式後、霊代を納めた箱を車に載せ、皇居へ移動したと報道。

【10月30日】

## 美智子の「真相」

### ..... オリンピックはスポーツをダメにする!?

一九六四年の東京オリンピックを記念し、国民がスポーツに親しみ健康な心身を培う日となっている「体育の日」。日本スポーツ振興センターや日本オリンピック委員会、今年もトップアスリートを集めた「中央記念行事スポーツ祭り2017」を開催した。そんなスポーツを謳歌する数千人規模のイベントが人知れず行われている中、オリンピックとスポーツのただれた関係について議論する集会がささやかに開催された。「東京オリンピックおことわりリンク」連続講座第4回目の「オリンピックはスポーツをダメにする!」である。私たちは東京オリンピック開催を災害と捉え、これまでに共謀罪や障がい者差別といった複数のテーマで議論を重ねている。

明仁、美智子◆福岡県で、ごみの再利用に関する展示施設「北九州市エコタウンセンター」を視察。空路で帰京。

明仁訪韓◆韓国の康京和外相が国会外交統一委員会で、明仁の将来的な韓国訪問の可能性を巡り「実現すれば、両国関係発展のための大きな契機になると考えている」。実現は容易ではないとの認識を示し「日本政府との協力や調整が必要で、

今回の講師である山本敦久さん（成城大学准教授）は、オリンピック批判がでない風潮でも、人種差別やレイシズムに対するアスリートの抵抗が連綿と続いていることに触れ、オリンピックはアスリートからスポーツを奪っている」と論じた。また、スノーボード界では、競争主義、結果主義に与することをやめようという新しい動きがあることも紹介された。

もう一人の講師である岡崎勝さん（「自由すばりつ研究所」所長）は、本来ならば身体的、精神的な自由を得るために行われてきたスポーツが、ルールを細分化し、勝者と敗者をつくることで優勝劣敗の思想を植え付け、多様性や個性を排してきたと指摘。スポーツやオリンピックが、一部の人間による個人的幻想ではなく、莫大な公共投資やファシズム化を加速させる装置となっていると断じた。

お二人の講演を聞いて、反オリンピックという主張は反スポーツとイコールではないということを感じながら、身体を酷使している不健康なトップアスリートたちの健康イメージに振り回されない、

現段階でいつ実現するか予測はできない」。

【10月31日】

明仁、美智子◆訪日中のフィリピンのドゥテルテ大統領とパトナーのシエリト・アバンセーニャを皇居御所に招き、懇談。宮内庁によると、明仁が「先の大戦では多くのフィリピンの人たちが犠牲になりました」と述べ、大統領が「両国は過去

「スポーツに参加しない秋」を堪能した。次回第5回講座は、十二月一日に「橋大学で予定されている。テーマは「ナショナルイベントとしての東京五輪」。運動をしてもスポーツはやりませんので奮ってご参加ください」。

（東京オリンピックおことわりリンク／児玉啓太）

### 差別・排外主義を許すな！新宿デモ

.....

一〇・一五 ACTION が、雨の中二〇名の参加で行われた。二〇一一年以来、在日コリアンの店などが集中する職安通りをメインのコースに設定したデモは今年で七回目になる。今回は四月の集会・デモ（早稲田・高田馬場）とともに担った、差別・排外主義に反対する連絡会と、移住労働者の労働運動を取り組むAPFS労組、直接行動（ダイレクト・アクション）の三団体の共催で開催された。

柏木公園の集会では、主催団体を代表してAPFS労組から今日の行動の意義

を乗り越えて今日の協力関係を築いてきました。戦後、日本からのあらゆる分野での継続的な支援に、心から感謝申し上げます」と返答。日本政府関係者によると、大統領のこれまでの過激な発言から、面会を不安視する声も上がっていたが、宮内庁によると、親日家の大統領は皇室に敬意を抱いており、懇談の冒頭では緊張した様子だったというと報道。

が訴えられ、続いて「高校無償化」からの朝鮮学校排除に反対する連絡会「反天皇制運動連絡会」「沖縄への偏見をおおる放送を許さない市民有志」「全国部落調査」出版差し止めを闘う原告として部落解放同盟国立支部「怒っているぞ！障害者切り捨てー全国ネットワーク」から、それぞれの取り組みの報告と連帯のアピールをいただいた。

集会後、新宿駅西口・南口・区役所、職安通りのデモでは、「レイシズムを許さない！差別はやめろ！ヘイトを止めろ！沖縄への攻撃を許さない！移住労働者への差別・搾取を止めろ！MXテレビのデマ放送弾劾！」などをコール、さらに、来日が迫るトランプへの抗議、関東大震災の朝鮮人虐殺否定に加担する小池都知事に怒りのコールが雨の新宿に響く。

職安通りでは、恒例の二か国語のコールで沿道の人たちに訴えた。解散地は柏木公園に戻り、地域共闘交流会とトランプ来日反対実行委からアピール。全体でも十一月五日には再びこの公園に集まる

ことを呼びかけた。

ミサイル避難訓練に見るように有事が日常化し、排外主義が蔓延する状況にあってアプローチはまだまだ足りない。課題を超えてつながってゆきたい。一二月二日には、「ニュース女子にNO!」渋谷デモを予定している。多くのご参加を(午後二時・神宮通り公園)。

(差別・排外主義に反対する連絡会/藤田五郎)

## 「第37回全国豊かな海づくり大会(福岡)」反対集会と現地抗議行動

.....  
一〇年ぶりに天皇が福岡に来る!というところで、天皇に抗議の声をあげよう

全国の仲間呼びかけた。遠くからの参加、お疲れさまでした。

一〇月二八日の反対集会。横田耕一丸大名塾教授のお話。天皇の生前退位はいが、天皇の都合での退位ではなく民衆の側から「こんな天皇はいらない!」という制度を作るべきという発言、さらに「教育勅語、けしからん!」と左翼は言うが、実はどこにも天皇のことは書いてないので問題ない、いつもながらの挑発的で、威勢よく、面白い講演。自分たちはもともと天皇制のおかしさを発信していかなければと話されていた。講演、質疑、各地からの報告があった。報告団体は、反天皇制運動連絡会、反天連(東京都)、反戦反天皇制労働者ネット(大阪市)、天皇制を考える会・静岡(静岡市)、天皇間

題を考える市民ネットワーク(大分市)。まさに全国各地から。講師入れて六四名。

一〇月二九日、早朝、天皇の予定が「海づくり大会」の式典だけで、鐘崎漁港の海上歓迎・放流行事は行わないことがわかった。残念。

一時集合予定だったJR東郷駅に早めに着した宣伝カーより早く公安たちが待機。東郷駅から式典会場の宗像ユリックスまで三キロの道のり。雨が降ったり止んだりする中、カッパや傘の装備で「天皇はいらない!」と叫びながらデモ行進した。途中で何台もの貸し切りバスに出会った。式典が終わって帰る人たちのようだった。「日の丸」の小旗を手に歩いてくる家族連れも。小学校の前に「全国海づくり大会 日の里東小臨時駐車場」と

いう看板。対抗車線の車から何やら、わたしたちを罵倒する声が聞こえた。車には「日の丸」のステッカーがあったようだ。すぐに公安が走ってきた。右派の妨害はそれくらい。こちらは五三人+宣伝カー運転手。公安は同じくらいかそれ以上。機動隊がいなかった。

(天皇制に問題あり!福岡連絡会/まえだヒソカ)



10月9日(月) ● おことわりリンク講座・第4回「オリンピックはスポーツをダメにする!?」(集会の真相参照)

10月13日(金) ● 原発被ばく労災損害賠償裁判第4回口頭弁論

10月14日(土) ● 関西電力本社包囲行動

## 「学習会報告」

### ケネス・ルオフ『国民の天皇——制度と個人のほざまで』

(岩波現代文庫、二〇〇九年)

著者は北海道大学で教鞭をとり日本滞在の経験もある米国人、ケネス・ルオフ。膨大な資料に目を通した実証主義の本としてとても面白かった。

《注》が七七ページもあり、参考文献も読書意欲をかき立てると参加者の声。

「大衆天皇制」が中心テーマで、戦後日本の象徴天皇制がどのような過程を経て「国民」の間に定着していったかが記されている。この著作が最初に出されたころ

にピューリッツァー賞を取った、ハーバート・ビックス『昭和天皇』は天皇制の政治的役割を追跡したものであるが、本書は制度としての戦後天皇制の改編を分析したものだとルオフは語っている。

戦前と戦後の連続性にスポットをあて、外国の君主制とくに英国の立憲君主制との比較を通して分析がなされている。そして特に面白かったのが、右派、民族派の運動に注目している点である。右派の

団体がしばしば合法的なルートを使って、政治的影響力を発揮した経緯を軽視ないし無視してきた歴史記述を修正する作業は、九州の片田舎で農業や左官業、理髪店を営む青年らを紹介し、全国に広がる草の根運動が元号法という天皇制に絡む法律の制定に至ったことを明らかにする。

この学習会でも頻繁に名前があがるような天皇(制)論を語った学者たちの整理も簡潔で、私のような不勉強な者にはガイドブックとしても便利だ。昨今流行の学者が、象徴天皇制は明治以前の伝統などと発言しているのを目にするが、政治的右派はそうした解

釈により戦後の民主体制を受け入れてきた。まさにその過程が記されている。そして近代以前の伝統への回帰ととらえるのは問題があるというのだ。報告の後はタイトルについて「国民」じゃなく「人民」がよかったのではないかと、「文庫版のためのエピソード」に憤慨する者や、否その理解とは違うなどとワイワイと盛り上がった。監修高橋紘。季刊『運動(経験)』10号の吉田裕論文とあわせてお読みいただきたい。次回は「天皇制を考える」(新教出版社)。

(桃色罎)



# 法政時報 INFORMATION

10月15日(日) ●差別・排外主義を許すな!

10・15 Action (集会の真相参照)

10月28日(土)・29日(日) ●全国豊かな

海づくり大会(福岡) 反対集会(集会

の真相参照)

11月3日(金) ●安保9条改憲NO! 全国

市民アクション国会包囲大行動

11月5日(日) ●トランプ来日反対! 新

宿デモ

11月11日(土) ●朝鮮半島の危機と東ア

ジアの平和構想

13時30分開場/ピープルズ・プラン研

究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 湯浅

一郎、杉原浩司/主催: ピープルズ・

プラン研究所 (03-6234-5748)

11月12日(日) ●DHCテレビはデマと

ヘイトをするな! 「ニュース女子」に

NO! 渋谷デモ

14時30分集合・15時デモ出発/神宮通

公園(JRほか渋谷駅) / 主催: 沖繩へ

の偏見をおおる放送をゆるさない市民

有志 (nonews@yoshi@gmail.com)

11月15日(水) ●亡国の武器輸出/日本版

「軍産学複合体」の今

18時開場/文京区民センター(地下鉄

春日駅ほか) / 池内了、青井未帆、杉

原浩司/主催: 武器輸出反対ネット

ワーク (NAJAT) (FAX03-5225-7214)

11月16日(木) ●生前退位、何が問題か「バ

ンザイ訴訟に学ぶ」

18時30分/横浜市開港記念会館(J

R 関内駅ほか) / 依田康子、石下直子、

小賀坂徹/呼びかけ: 主催: 日本基督教

団神奈川教区社会委員会ヤスクニ・天

皇制問題小委員会、「日の丸・君が代」

の法制化と強制に反対する神奈川の会

(090-3909-9657)

11月17日(金) ●26日(日) ●万人受けは

あやししい時代を戯画いた 絵 師、貝

原浩

12時~19時/ギャラリイ古藤(西武

池袋線江古田駅) / ギャラリートー

クあり/主催: 貝原浩の仕事の会

(090-2904-2518)

11月18日(土) ●沖繩の今を知ろう! 連

続学習会/第1回・高江編

13時15分開場/三鷹市市民協働セン

ター(JR三鷹駅) / 伊佐育子、高木

一彦/主催: 辺野古に基地はいらない

in三鷹 (090-2205-4075)

●辺野古新基地建設反対新宿デモ

14時アピール・15時デモ/アルタ前(J

Rほか新宿駅) / 主催: 辺野古への基

地建設を許さない実行委員会(連絡先

090-3910-4140 一坪反戦地主会・関東ブ

ロック)

●「平成」代替わりの政治を問う・連続

講座第2回「生前退位」報道を総括す

る

18時30分開場/ピープルズ・プラン研

究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 山口

正紀・天野恵一/主催: ピープルズ・

プラン研究所 (03-6234-5748)

11月22日(水) ●監視庁機動隊沖繩への

派遣は違法住民訴訟第4回口頭弁論

11時30分(10時30分よりアピール行動)

/東京地方裁判所(地下鉄霞ヶ関駅は

か)

●沖繩・辺野古 海にも陸にも基地を造ら

せない集会

10時30分/文京区民センター(地下

鉄春日駅ほか) / 翁長久美子/主催:

辺野古への基地建設を許さない実行委

員会(連絡先 090-3910-4140 一坪反戦

地主会・関東ブロック)

11月23日(木) ●「原発マネー」で現地は

本当に潤っているのか?!

13時15分開場/千駄ヶ谷区民会館1

F(JR原宿駅ほか) / 山崎隆敏・福

士敬子/主催: 福島原発事故緊急会議

(090-1705-1297 国富)

●ロシア革命100年 チェ・ゲバラ没後

50年 21世紀の革命を問う集会

13時15分開場/渋谷労働福祉会館(J

R原渋谷駅ほか) / 太田昌国、中村勝

己/主催: 同実行委員会 (03-5324-1385

変革のアソシエ)

11月26日(日) ●終わりにしよう天皇制

11・26大集会

13時開場・集会後デモ/千駄ヶ谷区民

会館(JR原宿駅ほか) / 吉澤文寿、

ビデオ上映あり/主催: 同実行委員会

(090-3438-263)

11月29日(水) ●天皇代替わりに異議あり!

終わりにしよう天皇制

18時30分開場/国労大阪会館(JR天

満橋駅) / 天野恵一/呼びかけ団体:

反天皇制市民1700ネットワーク、

京都「天皇制を問う」講座実行委員

会、はんでんの会・兵庫、ほか七団体

(090-5166-1251 寺田)

12月3日(日) ●大飯原発うごかすな! 現

地全国集会

13時/おおい町総合町民センター大

ホール(JR若狹本郷駅ほか) / 主催:

同実行委員会(090-1965-7102 木原ほか)

12月15日(金) ●原発被ばく労災損害賠

償裁判第5回口頭弁論

14時(13時よりアピール行動)/東

京地方裁判所(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

12月16日(土) ●オリンピック災害おこ

つワリンク連続講座第5回・ナショナルイ

ベントと東京五輪

14時開場/一橋大学東キャンパス国際

研究科4F大教室(JR国立駅)/鶴

飼哲、天野恵一/主催: 「2020オ

リンピック災害」おこつて連絡会

(080-5052-0270)

12月23日(土) ●「生前退位!」なによつ

テンノー 12・23に天皇制の戦争・戦後

責任を考える討論集会

13時30分開場/千駄ヶ谷区民会館1F

(JR原宿駅ほか) / 平井玄、北野登

桜井大子、天野恵一/主催: 反天皇制

運動連絡会

12月24日(日) ●「実質改憲」をゆるさな

い!! 天皇の、天皇による、天皇のため

の代替わり反対!

13時30分/静岡県男女共同参画セン

ターあざれあ(JR静岡駅)/桜井大

子/主催: 戦後72年連続講座実行委員

会 (054-271-7302 県共闘)